



News Letter



竹内緑を支えるルワンダの会 No.19(2022年3月)

いかがお過ごしでしょうか。この手紙がお手元に届く頃は、春爛漫・・・と言う季節でしょうか。2021年、皆様のお祈りとご支援に感謝申し上げます。2年間のコロナ禍にあっても、活動費が与えられ受益者及びスタッフが守られ、今日まで続けられたことに多大な感謝を捧げます。

ところでルワンダ政府は、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、2020年3月に隣国の国境を封鎖しましたが、今年3月7日より開通しました。近隣の国々のワクチン接種状況は分かりませんが、ルワンダでは高い接種率・・・になった、ということなのでしょう。陸路での出入りが可能になったことによって、コロナの感染状況がどのようになるのか、推移をみてゆかなければなりません。

今回は、受益者の人の傷病によって、ルワンダの医療事情を知ることになり、その貧しさに唖然とするのですが、私が知り得たルワンダの医療事情の一端をお知らせ致します。



リリマのヘルスセンターでコロナ検査を待つ受益者の人たちがしているマスクは日本から送られたものです。



＜リリマのヘルスセンター＞

リリマで暮らす人々の最寄りの医療機関。イタベホのセンターから3キロ余りでバスかバイクタクシーを使って行きます。病気になった時まずはここで受診し、対応できない場合紹介状を書いてもらいニヤマタ病院へ。ニヤマタ病院で対応できない程の重症になると紹介状を書いてもらい首都キガリの病院を受診します。

医療機関

活動地・リリマには、県が運営する「ヘルスセンター」があります。このヘルスセンターでは、医師は不在で看護師と助産師、検査技師などが働き、発熱や風邪、マラリアなど軽度の傷病や自然分娩などに対応しています。

ヘルスセンターの上位に病院があり、下位には「ヘルスポスト」があります。ヘルスポストも同じく看護師による診察で、検査の設備はなく軽度の傷病に対応しているようです。ヘルスポストの下位には、「地域のヘルスワーカー」という人たちがいます。看護師による数日間の訓練で地域に派遣され、その地域の要請に応じているようです。

二つの選択肢

数年前、受益者のひとり・10代の女性が足を骨折しました。地方の中核病院(以後、ニヤマタの病院を受診し、医師は首都・キガリの病院(以後、カノンベ病院と呼ぶ)で検査するように指示を出しました。骨折した足の応急処置だけで、50キロ余り離れた首都までバスを乗り継いで、片道2時間以上を要して病院へ行きました。夕方、検査を終え検査結果をニヤマタ病院へ提出し、それを見た医師は即座に、「当院では、治療はできないのでカノンベ病院

へ行くように・・・」と言いました。

直ちに紹介状を書いてもらい、翌朝、イタベホの担当者が紹介状を持ってカノンベ病院へ行きました。ところが、病院の整形外科では予約が多く1か月後でなければ治療できない、というのです。そこで、イタベホの担当者がニヤマタ病院の医師に会って、「カノンベ病院へ早く治療してくれるよう、とりなして貰えないか」と懇願します。それに対し医師は言いました、「あなたには、三つの選択肢がある。一つは、1か月待ってカノンベ病院で治療する。二つめは、別の公立病院へ行く、三つめは、私立病院へ行くことです・・・」と。

ルワンダでは、一人につき年間300円余りの保険料を支払えば、公立病院では検査も治療も無料です。但し、薬は保険の適応外です。イタベホの受益者は貧しく、この保険料を支払うことができません。そのため、イタベホが毎年保険料を支払っています。

選択肢の1と2は、保険が適応できる公立病院であり、3は保険が適応されないため全額実費です。ルワンダ人スタッフによると、選択肢2では少なく見積もっても3か月は待たなければならない、ということでした。つまり結論は、公立病院か、高額になる私立病院を選ぶかの、二者択一ということでした。

幸いリリマには私立病院に整形外科があります。この受益者の母が、郡の役所へ出向いて治療費の支援を申請しましたが、受理されませんでした。

結果、イタベホが治療費全額を支援することを決断し、リリマの病院で手術をしました。しかしながら、手術の当日は入院したものの、治療費が嵩むという母の判断で、手術の翌日には退院しました。

もう一つのケースがあります。昨年、受益者の一人である10歳の少年が右腕を骨折しました。そして、ニヤマタ病院を受診し、医師よりカノンベ病院で検査をするようにと指示が出ました。その検査というのは、骨折した腕のレントゲン撮影だけでした。つまり、ニヤマタ病院には、レントゲンの撮影機とその設備がない、ということでした。治



文中の骨折した
パシフィック

療の過程では、何度かレントゲン撮影によって骨の位置を確認しなければならないでしょう。その度ごとに、首都へ行くことは負担でありコロナ禍でもあること、前回の女性の経験からリリマの病院で治療することにしました。

驚いたことにリリマの病院では、治療費が先払いであり、支払わなければ治療はできません。その理由は、おそらく貧しい人の多いこの国で、治療はしたものの支払い能力のない患者さんが多く、経験から得た病院の方針なのでしょう。ルワンダでは、電気代も前払いです。



とまれ、女性と少年の治療は成功裏に終

補聴器を装着した
ジョセリン



えました。若い二人、仮に治療が成功していなければ、これから続く二人の人生は、足と右手が変形し不自由な生活となっていたことでしょう。ここに至るまでには苦慮しましたが、この結果にじみじみとした喜びと深い満足感を味わったことでした。

怪しげな歯科医

イタベホのスタッフの一人が、歯の噛み合わせが悪いと歯科を受診しました。そして、歯を削りましたが上手く噛み合わないため、数日後再度受診し、同じ治療が施されました。その翌日、治療した側の頬が大きく腫れ、強い痛みと38度台の発熱がありました。そこで、初回と二度目に出された処方箋を見せてもらい、治療の詳細を聞いたところ、この歯科医の知識と技術に疑義が生じました。「本当に歯科医の免許を有している人なのか・・・」と。

そのため、拙宅の近くにある歯科へ行くよう勧め、彼はここで治療しました。そこでの治療や処方箋は納得できる内容でしたが、このスタッフが回復して通常の生活に戻るまでに、2週間の時間を要しました。

ルワンダでは、概して公立より私立の病院の方が信頼できると言えそうです。このスタッフ

の問題も、前述の「三つの選択肢」と同じように、公立か私立の病院で治療するか、金銭上の問題でした。当初より、私は私立の歯科医院で治療するよう勧めていたのですが、保険の適応できる公立の歯科を選択したのでした。事実、治療費はこのスタッフの月収に対し約 2 倍の額になりました。

イタベホでは、受益者だけでなくスタッフとその家族に治療費や薬代を支援しています。それは、上記のスタッフと同様のことが生じるからです。公立病院でできない検査や薬代など、それだけで給与の 25～30 パーセント、時に 50 パーセントを占めるからです。歯の治療を行なったスタッフの場合も、治療費の全額をイタベホが支払いました。

首都・キガリの拙宅の周辺には、僅か 300 円余りの保険料が支払えないで、傷病時、医療施設にゆくことのできない人たちが居住しています。いのちを直接扱う医療、その格差は人権侵害です。ルワンダ国内だけでなく、アフリカ大陸、世界の貧しい国々で医療に与ることのできない人たちに、思いを馳せることでした。

医師は無給？

受益者の一人が公立病院に入院した際、同行したスタッフが憤慨して帰ってきました。スタッフによると、入院後数日を過ぎても医師に会えない為、治療が始まらない、痛みを耐えながら多数の患者さんが待っている、というのです。なぜ、医師に会えないのか、その理由は 10 か月間医師の給与が未払いであり、医師はこっそり病院を出て私立病院でアルバイトをしている、というのです。他の公立病院では薄給のため、医師が複数の病院でアルバイトをしている、とも聞きました。公立と私立の病院を比較して私立病院の方が信頼できることの一因は、医師の処遇にあるようです。

新型コロナの感染によって日本の医療体制の脆弱さが露わになりましたが、日本もルワンダも医療の問題は政治であり、国民のいのちを守るのは国の責任です。

それでは、どうぞお元気で過ごしてくださいように。平和を祈りつつ。

キガリにて。

2022 年 3 月

竹内 緑



祈りの課題・・・・・・・・以下のお祈りをお願い致します。

- 1、 受益者である子供たちが、「神を愛し人を愛する人」として成長しますように。受益者である少年・インマヌエルが洗礼を受けたいと、聖書の学びをしていましたが、コロナで中断しました。再度、学びを始め洗礼に至ることができますように。
- 2、 必要な活動費が与えられますように。
- 3、 今年 1 月、スタッフの一人がコロナに感染しましたが、大事には至りませんでした。お祈りに感謝いたします。続けて、コロナの感染から守られますように。
- 4、 私をはじめスタッフたちが、この働きにふさわしい者として整えられますように。



✦ 右から 2 人目：受洗を望むインマヌエル



本の紹介

竹内緑さんが活動されているルワンダのことをもっと知りたい人へお薦めの本を2冊紹介します。

まず紹介するのは、イマキュレー・イリバギザさんの『生かされて。』(PHP 文庫)です。



ルワンダでは1994年、多数派のフツ族によるツチ族への大虐殺がありました。

昨日まで同じ町で楽しく暮らしていたツチ族とフツ族が、昨日まで学校で机を並べて一緒に勉強していた友だち同士が、ある日を境にして殺人者と被害者となり、結果的に、3か月間で80万人とも

100万人ともいわれる人たちが殺害された、まさに人類史上最悪のジェノサイドでした。

著者のイマキュレーさんはツチ族で、当時は大学生でしたが、大虐殺により、海外にいた兄を除き、愛する両親も兄弟もみんな殺されてしまいます。

彼女自身は、あるフツ族の牧師の家のトイレに、ほかのツチ族の女性7人とともに匿われ、奇跡的に殺害を免れます。

本書には、大虐殺が起きる前の幸せな暮らしぶり、虐殺中の恐怖の3か月間、そして虐殺後にどのようにしてこの悲劇を乗り越えていったのかが、彼女の経験談としてつづられています。

これは単なる大虐殺の記録ではなく、極限状態の中での「愛とゆるしの物語」です。

2冊目は、唐渡千紗さんの『ルワンダでタイ料理屋をひらく』(左右社)です。

著者の唐渡千紗さんは5年前、会社勤めを辞め、5歳の息子連れて、シングルマザーとしてルワンダにわたり、まったく未経験だったタイ料理屋を開業した人です。

現在のルワンダは、94年の大虐殺のあと、国の強いリーダーシップで英語教育とICT教育が徹底され、「アフリカの奇跡」と呼ばれる経済発展を遂げたと言われます。

しかし、本書を読む限り、ルワンダはまだまだ貧しい国であることがわかります。首都のキガリでさえそうなので、農村部ではもっと厳しい状況なのでしょう。

日本の常識もほとんど通じません。ですから、ルワンダ人スタッフを雇ってタイ料理屋を経営するというのがいかに大変なことか、著者も、まずは日本というものを忘れることから始めなければならなかったと書いています。

それでも、ルワンダの人たちは、強くたくましく、日々朗らかに暮らしています。

その強さの源を、著者は、「あの虐殺を乗り越えてここまで来たのだというある種の誇りと、もう二度とあんなことは起こしたくない、あの時代には絶対に戻らないのだという固い決意。こうした強い国民感情が一人ひとりの根底にあり、それが国として結束させているのではないか」と言います。

日本とルワンダ、まったく違う国ですが、どちらが優れているとか劣っているとか、あるいは、どちらが幸せとか不幸とか、そんなことは一つの物差しでは測れないものだと思います。



NGOの名称は、ルワンダ語でITABWEHO(イタベホ)、この意味は

「愛すること、世話すること、癒すこと」などであり、私たちが行っていることです。



- 1 心の傷を癒すために心理学(精神)的だけでなく、全人的なアプローチを行う。つまり、心理的、肉体的、社会的、霊的な支援を行う。
- 2 心に傷を負った女性だけでなく、彼女の家族(子どもたち)をも含めて支援する。
- 3 必要な人には、シェルターを提供し、我々の保護下で生活を共にしてケアを行う。
- 4 支援する受益者は、ひとり一人を大切にすため30人余りの少人数とする。



以上は、我々独自のものであり、理念とも言える基本的考え方です。